『悪路王偽伝』

■タイトルバック

T「過却は人の世の常なるも、その輪廻の中に遺るものは歴史なり。新しき命なり。……『東日流外三群誌』」

■菊の下宿（夜）

狭い四畳半の部屋。

布団の中、就寝している中村菊。

畳にはみだした、赤みがかった長い髪。

どこからかそよ風がその頬をくすぐる。

菊「（目を覚まし）うう……ん」

その隣にも布団。

掛け布団がめくれているが、

誰も寝てはいない。

体を起こし、怪訝そうに見る菊。

背後、荒々しい吐息。

背筋が凍る菊。

恐る恐る振り向くと。

開いた窓、そこから吹き込む風。

窓枠に足をかけた、男の後ろ姿。

その腕の中には気を失った御幸が。

菊「み……御幸ッ？」

振り向く男。

その顔は人では無く、まるで蛙。

闇に響く菊の悲鳴。

■タイトル『悪路王偽伝』

■東京の町並み（数日後）

山高帽にコートの男達。

レトロな車、自転車の往来。

おかっぱ頭の女学生達。

片隅で子ども達が、

ヨーヨーに興じている。

T『昭和×年・春。東京』

■大学・廊下
にぎやかな学生達。

■同・実験室
雑然と並ぶ化学の実験器具。
水面の声「まあまあ…中村君の言いたいことは分かりますがね、でもね」
白衣を着た、教師の水面（みなも）。
度の強い丸メガネで神経質そうな顔。
眉を寄せ、新聞を読んでいる。
新聞の見出しは『帝都を騒がす少女連続殺人』。
憮然と立っている菊。
ワンピースを着て、髪は後ろで束ねている菊、すらりと背が高く、男のように胸を張って。
菊「ちいっとも分かってやしませんッ」
と、机を思いっきり叩く。
驚く水面。
菊「見たんです確かにッ！　御幸は、家出なんかじゃない、アレに誘拐されたんだってばッ！」
と、指差す。
その先に、カエルのホルマリン漬けが。
水面「そのアレって言うのがだね、しかしね」
菊「水面先生までウソだって言うんですか」
水面「女をさらっていく怪人なんて、紙芝居じゃあるまいし、ね」
菊「もういいですよぅ」
菊、ふてくされて座り込む。
菊「誰も真面目に聞いちゃくれない。近頃と来たら、子どもも大人も、ヨーヨーなんかに夢中になっちゃってるし。みんなみんな同じものしか見えてないんでしょうサ」
水面「まあまあ、それも流行りの世相だから。いずれは消えて誰もが忘れるだろうよ。

さ、ここは司直の手に委ねようじゃないか、ね」

声「あのう」　ドアがノックされる。

水面「（見て）どうぞ。開いてますけど？」

声「いや、そうじゃなくてね」

水面「？」

声「開けて。届かない」

水面・菊「……？」

■同・廊下

ドアがそっと開かれる。

廊下を覗き込む水面と菊。

その視線が、同時に下がると。

車イスに座った、

書生風の線の細い青年。

荒井悪路（あらいあくろ）である。

無造作な長めの髪に、

少年のように大きな瞳。

季節外れで不釣り合いな、

大きなコートを羽織っている。

左手の肘から先、

右足は付け根から無い。

悪路「（右手をあげ）やあ」

水面「な、なんだね君は」

悪路「君が中村菊ちゃんね。カエル怪人を見たって云う」

菊「誰サあんた」

悪路「僕は荒井悪路。笹井御幸さんの行方を調べております」

菊「…あくろぉ？　ソレ名前？」

水面「警察の方で？　失礼ながらそうは見えませんが」

悪路「軍人ですな。ちなみに陸軍ね」

訝しげに顔を見合わせる、水面と菊。

■ソーダファウンテン

丸テーブルに向かい合い座る、
悪路と菊。
隣のテーブルでは、
黙々とヨーヨーに興じている青年。
菊、興味なさげに一瞥して。
菊「で、陸軍って言ったっけ？　その体で？」
クリームソーダをすすっている悪路。
悪路「まあコネクションがね。ウマいなこれ。ねえ、おかわり」
と、女給を呼び止める。
菊「その軍人が何なワケ？　私叩いてもなんにも出ないよ。アンタが特高ならまだしもサ」
悪路「ハッハ、豪儀だねぇ。ちょっと話を聞きにきただけだから安心してね」
菊「……（怪しい）」
愉しそうに、スプーンを口元で遊ばせる悪路。
悪路「それでその、笹井御幸ちゃんをさらった男は、確かにカエル顔だったわけだね」
菊「だからそーだっつってるでしょ」
悪路「ふむふむ。それはこんなんだった？」
悪路、一枚の古紙をさしだす。
浮世絵風の絵柄で、カエルのような顔に長い尾が生えた怪物が描かれている。
菊「……！」
悪路「これなんだね？」
菊「う（何度もうなずく）」
女給がおかわりを持ってきた。
悪路「『いひか』だ」
菊「い、いひか？　いひかって？」
悪路「ひみつ、ひみつ」
クリームソーダを、下品に、音をたててすする悪路。

■鉄橋
不機嫌そうな菊。
菊、悪路の車イスを押して歩いている。

調子っぱずれの鼻歌をうたう悪路。

菊「なんで私がこんな……」

悪路「僕のような人間に一人で肉体労働させる気かい」

菊「だったらお仲間に手伝わせりゃいいでしょうが！　ふん」

悪路「僕ははみだし者なんでね。君と同じく」

菊「（足を止め）……！」

悪路「有名みたいじゃないか。女傑・中村菊と笹井御幸。婦人参政運動の若き最右翼」

菊「誇大宣伝よ、そんなの」

悪路「いいじゃないの、勇ましくて。強い女もまた魅力的じゃないか。女学生というのも扇情的でよろしい」

菊「そういった興味本位の侮蔑が女を貶めてきたのよ！　とくに軍人のサ」

悪路「おー怖い怖い。でも勿体ないなあ。可愛いのにそれを生かさないなんてエヘヘ」

右手で、菊の尻をまさぐる悪路。

菊「犬畜生」

引きつる菊の肩。

悪路を橋から落とそうとする菊。

車イスが引っかかっている。

悪路「（慌てて）死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ」

■河畔

工業地帯を流れるドブ川。

遠く、黒々とした煙をあげる煙突。

数人の釣り人達。

橋の下では浮浪者が火に当たっている。

そこへやってくる菊と悪路。

菊「疲れたあ。何なのサこんな所に連れてこさせて……まさか」

悪路「（顔も見ず）別にイタズラなんてしないから心配しなさんな」

菊「……（ちょっと面白くない）」

悪路、川岸の地面を指差す。

悪路「じゃ、あそこらへん、掘ってみて」

菊「……はあ？」

悪路「だから掘ってくれって言ってるの。ここ掘れワンワン」

菊「あ、あんたねえ、私は」

悪路「かよわい女の子、だとでも？」

菊「……やるわよッ！」

ほくそ笑む悪路。

菊、袖をまくって素手で地面を掘る。

悪路「土、柔らかいだろ？」

菊「うん、誰か一度掘り返したのかしら？」

菊、ひたすら掘る。

掘る掘る掘る。

菊「（汗だく）ひーひー。こんなことして御幸が見つかるんでしょうね」

悪路「（淡々と）がんばれー負けるなー」

菊（声）「（苛立ち）あのヤローー」

ふと、掘る手が止まる。

悪路「出たかい」

何か、固いモノ。

土の中、何かの、白く小さい骨。

菊、怪訝そうにそれを手に取り。

菊「なにこれ。鳥のホネ？」

悪路「ちょっと見せて」

菊、骨を手渡す。

悪路「（真剣に）ふむ」

裾についた土を払う菊。

菊「なんなのサそれ、あーあ土だらけ」

悪路「……この川はね。昔は捨て子の隠し場所だったんだよ。思った通りだね」

菊「それとこれがどう関係が……って……ま さか……そ、それって」

悪路「赤ん坊の骨だろうね、うふふ。まだ新鮮な」

菊「（後ずさって）い……いっやぁー！」

菊、そのまま川の方へ。

小石につまづく足…

高い煙突。その先に広がる曇天。

大きな水音、響きわたる。

■貧民窟

ドブ川の土手。
その内側に、今にも倒れそうなバラックが雑多に並んでいる。
一つのバラックの前、浮浪者達の行列。
浮浪者達に叫ぶ、無精ひげの大柄な男。
汚らしい白衣を着ている。
スラムの医師、小林武士である。

小林「こらそこぉ！　ガキと年寄りからだっつてんだろーが！　あーテメェ横入りすんじゃねぇ、診てやんねえぞ！」
浮浪者の男「せんせー、おらぁ昨日からハラぁ病んでしょうがねえんだよ」
小林「ダメダメ！　文句あんなら、他行けダアホ」
悪路の声「相変わらずだね小林先生」
小林「…んー？　（見て）…！」
車椅子の悪路。
気楽そうなその顔。
車椅子を押している全身ずぶぬれの菊。
ふてくされているその顔。

悪路「や。この前の事件以来ですな」
菊「……」
小林「（呆れ）……奇妙な組み合わせだな」

■小林のバラック

トタンや廃材で出来た家。
机に丸イスと、形だけは診察室の体裁が整っている。
無愛想に、布で頭をふく菊。

菊「（頬をふくらませ）……誰サこの人」
悪路「僕の主治医でね、小林先生だ。軍医正を辞めてこんなところで営業してる奇特な御仁だ」
小林「テメーに云われたかねえな。陸軍特務機関の荒井悪路さんよ」
悪路「ま、ま。そう邪険に扱わないでくださ

いな」

小林、指を三本立たせて。

小林「用があるなら三分ですませな」

悪路「（苦笑し）検屍をお願いします」

と、さきほどの骨を手渡す。

小林「（手に取り）ああん？　……これだけかあ？」

悪路「川辺に埋まってたんです。他は犬にでも喰われたみたいですな」

菊「イヌ……イヌってあーた」

小林「（見つめ）生後間もない乳幼児の肩胛骨だな……多少軟化してる。水辺に埋められてたせいかもしれんが」

悪路「なるほどやはり。いや、参考になりました」

小林「ふん。終わったならさっさと帰りな」

悪路「もう一つ……最近、堕胎を頼みに来る患者が増えませんか。それと水死体」

菊「ちょ、」ちょっと、何サそれ。御幸の話じゃないの？」

小林「（真剣に）……」

悪路「その顔では、その通りのようですね」

小林「またお前の事件なのか」

悪路「ええ。子殺しの世相なのです」

菊「なんなのサもう！」

■川辺（夕）

辛子色に染まったドブ川。

遠くの工業地帯と併せて、

混沌とした景観を見せている。

夕日を眺めながら進む悪路、菊。

見送る小林。

菊「っくしゅん！」

悪路「おや、風邪かな？」

菊「（睨み）誰のせいサ」

小林「なんなら診てやろうか。順番だがね」

と、浮浪者達を指差す。

菊「いいわよッ。こんな貧民窟なんかで。私

は誉れ高き帝都の人間なんですからね」
小林「…彼らだって東京の人間だぜ」
菊「ふん。あいつらは社会になんの貢献もしていないじゃないサ」
小林、突然菊の胸ぐらをつかむ。
菊「な、なな、何するのよッ？」
悪路「（片手で小林をひっぱり）どうどう」
小林「何様だてめぇ」
菊「？？？？」
悪路「菊ちゃんはね、婦人参政運動家の若き旗手だよ」
小林「ああ？」
菊「わ、悪い？　来たるべき時代に女性は立ち上がらなければならないのよ。女というだけで足蹴にされる時代は終わったの」
小林「彼らならいいのか。彼らなら足蹴にされても」
菊「は、はあ？」
小林「サンセイでもハンタイでもなんでもいい。蔑まれる側の気持ちが分かるなら、なぜ彼らのことを考えてやれない」
菊「そんな…こと…」
小林「彼らだけじゃない、悪路だって…」
悪路の声「小林」
ハッと振り向く小林。
氷のように冷たい悪路の目。
悪路の顔から表情が消えている。
ゾッとする小林と菊。
悪路「それぐらいにしなさい」
小林「すまん」
菊「…？」
悪路「さ。戻ろうか、菊ちゃん」
菊「う、うん、あの…」
小林「ん？」
菊「その…言われてみれば、そうですよね。私、また来ます」
小林「…」

■下町（夕）

あかね色にそまった町並み。
整然と長屋が立ち並ぶ。
颯爽と駆けぬけていく人力車。
はしゃぐ子供達。
道なりに、提灯が飾り付けられている。
眺める悪路と、車椅子を押す菊。

悪路「今日はハレの日だったのかな」
菊「ああ、縁日。蓮太神社ね」
子ども達を眺める、悪路の涼しげな瞳。

悪路「いいね」
菊「祭り、好きなんだ？」
悪路「遊興は日々の穢れを払ってくれる。僕のような人間のそれでも」
菊「小難しいなあ。まあいいわ。なんなら案内してあげようか？」
不思議そうに見る悪路。
菊「何サ。だって、その体じゃ人混みは辛いでしょ」
悪路「嫌われてると思ってたんだがね」
菊「そりゃ好きじゃないわよ。でも、一応は御幸のために、やってくれてるんだろうからサ」
悪路「（じっと見て）……」
頬を赤らめる菊。うつむく。
菊「な、なにサ」
悪路「いや、ありがとう。さ、行こう。もっと力を入れて押してくれたまえよ」
菊「（ムスッとして）あのねぇ」
菊、車イスを押し続ける。

■神社（夜）

炎のように赤く、闇夜を切り取る鳥居。
その先に、いくつもの出店。
賑やかな雰囲気に楽しむ人々。
飴を売る出店に並ぶ菊。
飴を二つ手にして振り返る。
と、誰もいない。

不思議そうに辺りを見渡す。
視界の片隅、子ども達に囲まれている悪路。
一度に三つのヨーヨーを、片手で自由自在に回している。
子ども達の、尊敬に満ちた眼差し。
悪路、得意げに胸を張っている。
呆れながらも、優しく微笑む菊。

■大学・外観（夜）
満月。
月明かりの下、
おぼろげにそびえる校舎。
闇に悪路の輪郭が浮かぶ。
校舎を見上げる悪路。
その、冷たく光る目。

悪路「……」

■同・実験室（夜）
仄かな月光に照らされる室内
呆然と座っている水面。
あらぬ方向を見つめている。
その横、カエルのホルマリン漬けが不気味に月の光を浴びている。
突然ドアが乱暴に開く。
驚いて見る水面。
着物姿の菊が立っていた。

菊「……水面先生？　まだいらっしゃったんですか」
水面「な、中村君？　何だね、こんな時間に」
菊「いえ、ちょっと忘れ物しちゃって」
水面「昼間と服が違うが、ね」
菊「（むくれて）色々ありまして」
水面「……？」
菊「先生は？」
水面「ああ、ちょっと調べ物を、ね」
菊「へえ？」
壁の鏡を覗く菊。その頬に、口紅の朱が

ほんのりとはみだしていた。
菊「あ、やだ」
と、備え付けの水道の蛇口をひねる。
菊「あれ？」
水面「どうかしたかね？」
菊「水が出ないんです。あ、そういえば夕方から水道管工事するって云ってたか」
水面、みるみる青ざめていく。
水面「なんだと」
菊「あら、聞いてなかったですか？」
水面「知らない！　私は知らないぞ」
菊「？　それじゃ私、帰りますね…」
部屋から出ていく菊。
慄然とする水面。

■同・裏手（夜）
校舎の影、人目につかない場所。
いかにも禍々しい、古ぼけた井戸。
男の荒い吐息が近づいてくる。
それは汗だくの水面。
慌てて井戸の蓋を開き、中を覗き込む。
探るように見て、安堵のため息。
悪路の声「何がそんなに気になりますかな」
ハッと振り向く水面。
闇にとけ込むように佇む悪路。
水面「あ…あなたは」
悪路「御幸ちゃんを連れ去ったのはあんただね。水面先生」
水面「何を急に。私はただ水道が使えないと聞いてこの井戸を見に来ただけだがね」
悪路「水道を止めさせたのは僕だ。そうすれば、この大学の水源はこの井戸しかなくなるからね」
水面「なに…なに？」
悪路「水道が止まったのは夕方からではなくつい先ほどからだよ。だからあなたが隠したい物はまだ誰にも見られていない！」
水面「（顔を強ばらせ）貴様…！」

菊がいつの間にか立っていた。
菊「水面先生、あなたがまさか……」
水面「中村君！　そうか……君も一枚かんでいたのか」
菊「ウソでしょ……？　ウソよね」
水面「（辛そうに）なぜ……ここだと？」
悪路「『彼ら』は地下を通る水脈を進み井戸を拠点にする。被害現場の分布を考えると、拠点として使える井戸はここしかないんだよ：水道管の行き届いた大学構内で、こんな古井戸を使う人間はいない」
水面「全てお見通し……か」
眼鏡を外し、ゴミのように投げ捨てる水面。
その体が不気味に蠕動。
肩が張り、盛り上る背中。
長い尻尾がズボンからはみ出てくる。
いつの間にか、魚のような、蛙のような面相に変わっていた。
菊「その顔……あ、あのときの……！」
悪路「井光（いひか）。古事記にも記録されている民さ」
突然、水面が菊に飛びかかる。
菊「！」
水面「中村君……君……だけは」
菊を無理矢理抱きかかえる水面。
そのまま跳躍し、井戸に飛び込む。
微動だにせず、ただ井戸を睨む悪路。

■井戸の中
水中を、深く潜っていく水面と菊。
必死にもがく菊。
ふと目を開くと。
眼前に浮かんだ、頭蓋骨。
空洞化した眼窩と、菊の眼が合って。

■地下空洞
菊を抱え、かがむような姿勢で歩く、

水面。
足下を地下水脈が流れる。
放心している菊。
その瞳には、うっすらと涙が。
菊「さっきのが、御幸なの？　どうして」
水面「拒んだからだ」
菊「何をサ！」
水面「子を産むことをだ！」
言葉を失う菊。
水面「アイツが云ったとおりだ。私は井光の民。最後の、ね」
菊「……最後の？」
水面「血を絶やさぬためには子が必要なのだ。それを拒む女はただの邪魔者、だね」
菊「それだけの理由で、御幸を？」
水面「死者を気にしている場合かね？　助けを求めようと、あの男はもう追ってはこれまい」
そのとき。背後から何者かの足音。
菊「誰かが……歩いてくる？」
水面「（そっと振り返り）……？」
そこには、悪路が立っていた。
左手の肘から、黒い腕が生えている。
地下の闇よりさらに深く、黒く。
同じく、右足の付け根からも、
漆黒の足が生えている。
水面「き、貴様一体……？」
悪路「幻肢（げんし）、というのをご存じかな。事故などで失われた手足の、感覚だけが幻覚として残る症状だけど」
悪路、左手を自らの眼前にかざす。
悪路「僕の幻肢は少々特殊でね。闇の中でのみ実体を得る。僕はこの左手で彼岸の風を掴み、この右足で幽世（かくりよ）の土を踏むのさ」
水面「……そうか、思い出したぞ。その昔大和に敗れ、生き延びるために帰順した――

生まれてすぐ四肢の一部を切断し、平伏の証として献上するという」
不敵に笑う悪路。
水面「悪路王の一族」
悪路「よくご存じだ。でもお互い様だろ」
菊「あ、あんたもバケモノだったの？」
悪路「化け物？　失礼だね菊ちゃん。僕も…
…そこの水面先生も、れっきとした人間さ。ただ、僕たちの存在はその歴史ごと失われたのだよ」
冷たく睨む悪路。
悪路「歴史も人の形も、目に見える一つの形では無い。しかし国は、それが一つであるように見せかけたいのさ」
水面「そんなものは幻想だ」
悪路「その幻想を守るために、僕がいるんだよ」
水面が、低く唸りだした。
菊を投げ捨て、悪路につかみかかる。
組み合う悪路と水面。
悪路「話し合いという言葉を知らないか」
水面「見逃すつもりもあるまい」
悪路の左手が鞭のようにしなって、伸びる。
押し出されるように吹っ飛ばされる、水面。
悪路「あんたは人を殺しすぎだもの」
水面「それだけではあるまい。国は私達の存在そのものが疎ましいのだろう」
悪路「歴史は一つで充分だ。余地は無いよ。あんたや、僕の」
水面「分かっている。だが私は！」
突っ込んでくる水面。
悪路、右足で払いのける。
悪路「あんたが逃がした女達も、赤ん坊を流していたよ」
水面「…！」
悪路「もうあきらめろ。ただの人として生き

るなら見逃してやる。自分だけの真理など捨てろ」

水面「……」

水面、一瞬逡巡するが。

咆哮をあげ、悪路に飛びかかる。

悪路「残念だ」

悪路の左腕が大きく伸び上がり、水面の首を瞬時に掴む。

悪路「還るがいい。偽りの歴史の向こう側へ」

悪路の左足が、剣のように鋭く伸びる。横に一閃。

一瞬の鋭い衝撃。

水面の上半身、吹っ飛んでいく。

忘れられたように残った下半身。

菊の目の前に、水面の上半身が落下。

驚き、怯える菊。

水面、虚ろな目で手をさしのべる…

水面「な、中村君……君は……君なら虐げられ――分か」

菊「（泣き叫ぶ）来ないでぇ！」

悲しげに目を細める水面。

そのまま力無く絶命する。

それを横目に見る悪路。

静かに菊に近づいていく。

悪路「最後の言葉ぐらい聞いてやってほしかったんだけどな」

菊「いやあッ！　あんたも……あんたも！

御幸は……」

悪路「御幸ちゃんは――」

菊「御幸を返してよ！　化け物！　鬼！」

悪路「（うつむいて）……」

悪路、左手を菊の額にかざす。

菊の目をそっと遮る。

菊「あ……」

そのまま、意識を失って倒れる菊。

■大学・実験室（翌朝）

床に倒れている菊。

かばうようにかけられた悪路のコート。
学生達や教授が心配そうに囲んでいる。
教授「おい、君」
ぼんやりと目覚める菊。
教授「こんな所で……風邪をひくぞ」
菊「（体を起こし）私……どうして。あれ？」
菊、コートに気づく。
黙ってそれを見つめて。
コートに頬を寄せてみる、菊。
身を縮め、顔をうずめる。まだ暖かいのだろう。
目を細め、悩む。
何かが思い出せそうで、思い出せない。
菊「あれえ……」
菊の頬、崩れた化粧に、涙が伝った跡。

■下町（朝）
強い秋風に、木枯らしが舞う。
人の気配は無い。
小さく、鳥のさえずりだけ。
一人、車イスで進む悪路。
それをそっと押す手。
悪路「？」
小林だ。
小林「よお」
悪路「ああ……おはよう」
小林「その様子じゃ、またやってきたな」
悪路「僕の跡は残らなくていい。歴史にも、あの娘にも」
小林「気張りやがって。ガキのくせに」
悪路「小林先生よりは大人だよ。これでも仕事は選んでるんだ」
小林「ふん。この国で生きるなら、やりたいようにやる方がいい。お前の拠って立つ場所は、辛すぎる」
悪路「それでもいいんだ。地に足をつけていられる」
小林「（苦笑し）ま、俺は忘れないでおいて

やらあ。お互い歴史には残らねえだろうからな」

微笑む悪路。どこか寂しげに。

悪路「先生、僕は……狡いかな？」

陽光が強くなってきた。

悪路の手元で、ヨーヨーが遊ぶ。

くるくる回り、

また戻り、くるくる回る。

また戻る。

了